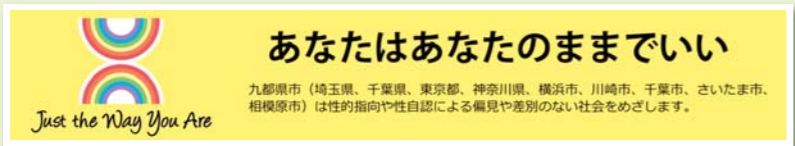


1 LGBTへの配慮に向けたメッセージを発信



近年LGBTを取り巻く環境は大きく変化し、社会の関心が高まっていますが、理解が進んでいるとは言えません。平成29年度には、九都県市でLGBT配慮促進に向けた共通メッセージを作成し、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、様々な活動で効果的に発信していくこととなりました。さいたま市においても、LGBT等性的少数者への偏見や差別をなくし、多様な性についての理解を促進するため、共通メッセージを活用した取組を実施しています。

2 学校での教育・啓発活動 ~性のあり方は皆違って当たり前~

市内の教育現場でも、子どもたちへのLGBTに関する教育・啓発が進んでいます。昨年12月4日に、さいたま市立本太中学校で行われた全校生徒向けの講演会では、LGBTについて取り上げました。その一部を紙面でご紹介します。



演題 多様な性と生 ~誰もが自分らしく過ごせるために~
講師 進藤夏葉さん
 *愛知県生まれ、現在は埼玉県川口市に在住。NPO団体に所属。



「LGBT」という言葉を聞いたことのある人は手を挙げてください（大半の生徒が挙手）。たくさんの方が知っていますね。自分の周辺でLGBTを探してほしいのではなく、「自分の身近な場所にLGBTの人がいるかも」ということを知っておいてください。

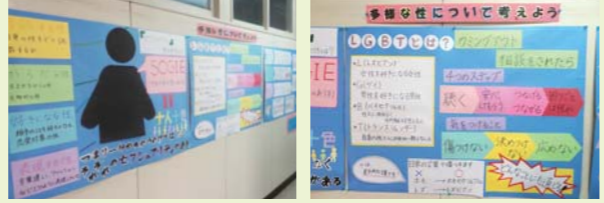
性の違和感を乗り越えた

私は中学生くらいの頃から、他の女の子との「好きな男の子」に関する話題に違和感がありました。自分はどちらかという女の子が好きだったので。誰にも相談できず、自分のセクシュアリティを隠すようになりました。高校の頃には悩んで不登校になりましたが、転校先の高校にはそれぞれの違いを認め合える仲間たちがいて、私もだんだんと自分らしさを受け入れていきました。

性別の「らしさ」は人それぞれ

性のあり方には4つの軸「からだの性」「自認する性」「好きになる性」「表現する性」があります。この4つ

のあり方は誰もがもっている個性。SOGIE =Sexual Orientation and Gender Identity or Expression (性的指向と性自認と性表現)は、一人ひとり違って当たり前です。「男らしさ」「女らしさ」という言葉が自分に当てはまらないことがあっても、別におかしいことではありません。「(男なのに、女なのに) ~なんておかしい」「男らしく」「女らしく」のような発言で傷つく人もいます。まずは自分の身の回りから、互いの違いを受け入れて少しずつ意識を変えていけるといいのではないのでしょうか。



進藤さんの講演会を聞いた生徒たちが、自ら発表内容をまとめて、掲示物を作成しました。

進藤さんが伝えたい

3つの大切なこと

- 知る** 多様な性と生があること
- 考える** 違いがあっても当たり前。変なことじゃない
- 変える** 誰もが安心して過ごせる場へ

講演会を聞いて

生徒の感想

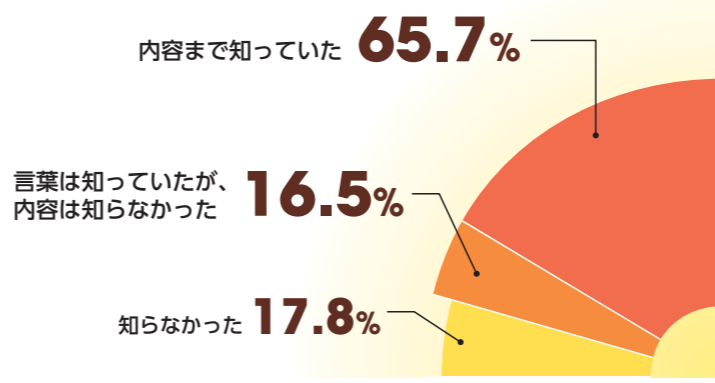
友達などにカミングアウトをされたら、まず真剣にきいてあげて、安心できるような声をかけて傷つけないように相談にのってあげたいと思います

LGBTは特別ではなく、一人ひとり顔や声がちがうように、1つの個性なのだと知ることができました

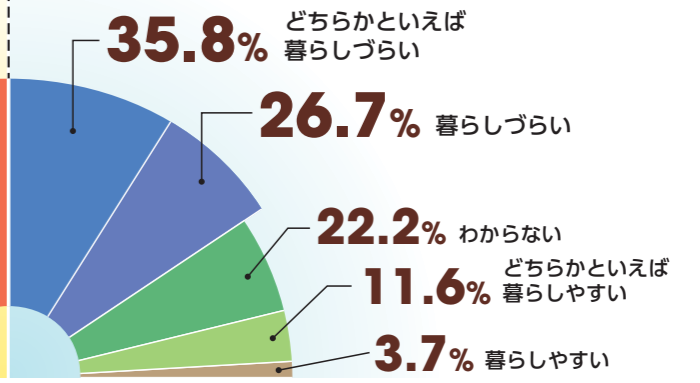
自分とは、ちがう考え、性を持っていて当たり前なので、そのちがいを大切にしていきたいと思いました



Q1 あなたは、「LGBT」という言葉を知っていましたか。



Q2 性的少数者が暮らしていくにあたり、あなたは、現在の日本社会をどのように思いますか。



「性のあり方」を次の4つの要素から考える。

「性のあり方」が多数派とは異なっている人々のことを「性的少数者」「セクシュアルマイノリティ」と呼ぶことがあります。LGBTとは、そのような性的少数者の総称として使われることもある言葉です。レスビアン(女性同性愛者)、ゲイ(男性同性愛者)、バイセクシュアル(両性愛者)、トランスジェンダー(身体の性とこの性の不一致)の頭文字を取っています。日本では、LGBTの人口規模に関する公的統計等はありませんが、3~5%といわれており、企業の調査では8~9%との調査結果があります(電通ダイバーシティ・ラボ「LGBT調査2018」)。

人それぞれの性

従来は、女性であれば男性を好きになること、男性であれば女性を好きになることが「普通」だと考えられてきました。しかし、最近はそのような一人ひとりの「性のあり方」も個性の一種だと捉える考え方が広がってきています。

近年の性の多様性を認める動き

- 文部科学省が「性的マイノリティ」の児童・生徒全般に配慮を求める通知を发出(平成27年)。
- 文部科学省が教職員向け手引きを作成・公表。
- 地方自治体が同性パートナーの証書を発行する制度を開始。
*東京都渋谷区、世田谷区、兵庫県東宝塚市など平成31年1月現在11自治体で実施、さいたま市でも制度を検討しています。
- 多様な人材を採用するため、多様な人々が快適に仕事ができる職場環境であることを積極的に発信する企業が多数登場。
- 一部の生命保険会社や携帯電話会社が、家族を対象としていたサービスを同性パートナーにも適用。
- 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の大会ビジョンにおける基本コンセプトでは、性的指向を含む「あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩」と言及。

今後も、性の多様性のあり方への理解が進んでいくことが期待されています。

平成30年11月に実施したインターネットによるアンケート調査の結果、さいたま市在住で「LGBT」という言葉を知っている人は8割以上になりました。この機会にLGBTについての理解を深め、性の多様性について考えてみましょう。

LGBTの認知度は8割超

LGBTが直面する困難

LGBT等の性的少数者が子どもに困りやすいこととして、主に「男女の区別への違和感」「LGBTへの無理解から生じる言動」が挙げられます。トイシや着替える場所等では身体の性で男女に分けられることが一般的ですが、身体性とこの性の性が一致していない人にとっては違和感が生じます。また、LGBTが身近にいないことが前提となった言動(「ホモ」「レス」「オカマ」のようなLGBTを揶揄する発言等)により自尊心が傷つけられます。

大人になっても、自分の「性のあり方」を隠して生きていくことに苦しんだり、男女のパートナーが前提となった制度を利用できないことなどがあります。